

磐梯山大爆発の惨状（明治21年）

猪苗代湖の北方にそびえる磐梯山は、安山岩質の成層火山で、会津富士とも呼ばれ、風光明媚な国立公園で、裏磐梯の景色は特にすばらしい。信頼できる記録に残された噴火は806（大同1）年と1888（明治21）年の2大水蒸気爆発であるが、この絵図は後者による惨状を伝えている。

水蒸気爆発とは、地下のマグマからの水蒸気や地下水が熱せられて生じた水蒸気が、次第に蓄積されて圧力を増し、遂に周囲の岩石を爆破する現象で、マグマそのものは噴出されず、むしろ、山体を破壊する。老衰した火山でよく発生し、休眠期間も概して長く、人々に油断されがちなので、大爆発で思わぬ大災害を出しやすい。この磐梯山噴火の岩屑流は、比較的低温で乾燥していたらしいが、河川に突入して泥流に化した。なお、磐梯山の頂部には大磐梯・小磐梯などの4峰があったが、北側の小磐梯の大半が崩壊し、U字形の爆発カルデラ（径2,000～1,500m）ができた。

磐梯山麓では、同年7月8日から弱い地震や鳴動がときどき感じられたが、人々は気にとめていなかった。ところが、快晴の同月15日朝7時ごろから遠雷のような響きが聞こえ、約30分後から強い地震が続発した。7時45分ごろ、その揺れが一段と激化し、突然、ものすごい爆発音をたてて、山頂の方から真っ黒い煙が噴出され、瞬時に原子雲のように広がった。

その後、引き続き、15～20回も大爆発が反覆され、噴煙は数千mの上空まで上がり、南東方約100km先の太平洋まで降灰した。爆発音は、風下では太平洋岸まで、風上では約50km先まで（内聴域）と長野県北部や新潟県上越市、佐渡島（外聴域）で聞こえ、爆発地震は約50km先まで感じられた。山麓では熱砂、泥雨が降りしきり、強い爆風、鳴動、火山雷が認められた。岩屑流—泥流は主に北方になだれ落ち、長瀬川の本・支流をせ

き止め、松原湖・秋元湖・小野川湖や五色沼・るり沼などの多数の湖沼を造った。流れ山（泥流丘）もたくさんできた。現在見られる裏磐梯の美しい景観は、こうして生みだされたのである。

これらの現象はわずか2～3時間内に起きた。緑の谷は泥海に化し、朝食中の多くの村人は、逃げる間もなく、家もろとも埋没してしまった。5村11集落が襲われ、雄子沢・細野は全滅した。死者461人、傷者約70人、被災戸数563戸。

この大噴火は、日本の火山の活動が、近代科学の立場から本格的に調査研究された最初の機会であった。特に、東京大学の関谷清景・菊池安らの論文により、水蒸気爆発の典型として世界的に有名になり、「磐梯山式」という、噴火の標準型式の一つにされたこともある。崩壊した山体の容積は1.2～1.5km³程度、岩屑流—泥流の平均速度は時速約80kmと推定されている。

この噴火はごく衝撃的な一大異変だったので、マスコミも当時なりに大奮闘した。たとえば、大阪から進出した東京朝日新聞は、創刊6日目にこの噴火が突発したので、すぐに、画家の山本芳翠を記者1名とともに現地に派遣し（郡山まで汽車、それから先は人力車）、細密な木版画を製作し、印刷して、8月1日付新聞の付録として配った。新聞界では、画期的なことであった。当時の新聞は、写真を印刷する技術はまだなかった。また、写真撮影もまだ普及していなかったのである。

なお、1954（昭和29）年春の前記U字型カルデラ壁の崩壊を实地調査した筆者は、磐梯火山の活動に対する関心を一段と深め、噴火による惨害を繰り返さないように、気象庁の全国火山観測体制整備の一環として、1965（昭和40）年春、隣接の吾妻・安達太良の両火山とともに、常時火山観測を創始した。磐梯火山担当は若松潤候所である。

（諏訪 彰・地震火山学者）



磐梯山噴火之図（東京大学地震研究所蔵）

盤梯山噴火之圖

福島縣下岩代國盤梯山の噴火、延世の大慶事ト
時ハ明治廿年七月十五日
午前八時十分頃突然とる
一聲の物音と共に西北の山
上より一團の黒雲立上り
砂石とて、大樹を折り
田畑を埋め、其地災り為、
六里四方の害を蒙り五百
人以上の死亡者あり、肩湯
者も亦く家屋を埋没せし
數百軒余、及び現場の空況
ハ筆紙の及ぶ所非を、矢前
代志聞の災害ハ略図哉
加えて出版

